

解題

淇園詩話

一卷

皆川 愿著

皆川愿、字は伯恭、淇園と號す、又、有斐齋、笥齋の號あり、通稱は文藏、京師の人なり、年甫めて十五、韓客を見て、席上に唱和す、韓客その工を嘆ぜり、後ち一家の學を成せり、弟子門籍に上るもの三千餘人、臺閣諸公の弟子の禮を執るもの甚衆し、而して平戸侯最も敬重せり、文化四年五月十六日歿す、年七十四。

此書一に盛唐を以て標準とせり、而して其自言に曰く、詩は體裁格調精神の三者相須つて始めて完璧となる、而して精神は又三者の總要たりと、是れ以て其の書の内容を推すべし。

余嘉時人稍知惡明人王李七子之輕佻牽強焉而病其纖弱鄙細
 日趨於衰晚之氣也夫王李數人所得於唐者獨結構字句之間而
 已其神韻風情無復所容力則漫作支離散渙不了之語以當之時
 陸梁夸詡強張氣勢以作大欺人輕薄之徒從而影附風靡末流之
 弊殆至于有不成語者職七子遺禍也今既能知惡之則何不易之
 以盛唐諸公風神格調沈實優柔者乃可而又附同閨季頹風倦俗
 以自喜者何也世道日降文章隨汚雖則理勢所然亦得莫非指導
 乖方乎余性薄劣其於詩最不嫻而好時言之但出於己者拙陋
 也言不足信于世試問出其一二則人皆俯而笑余亦羞與輕俊子
 弟衡錙銖於小技輒不畢其說而止此歲冬得暇歸京友人皆川伯
 恭首示詩話一卷其談詩特於精神格調繾繾致意而一以盛唐爲
 標準錢劉以下則不屑其論四唐之品及明人之失衡懸度設不失

平量其他篇章之體裁，與字句之法局，至乃證引解故之細，皆鑿鑿可據，其於詩道善亦盡矣。而伯恭詩高古雅健，以領袖後進，其所言乃其所能，則非如余之取笑比也。則余知此編出而夫惡王李，而不得門者知方向矣。而向笑余者亦知其言之不大悖矣。余是以喜伯恭此書，非淺淺故於其屬序也。不復辭云。辛卯十二月

東讚

柴邦彥撰

洪園詩話

平安 皆川伯恭先生著

門人 筑後淡輪秉 全按

播磨園 修

平安巖垣 明

夫詩有體裁有格調有精神而精神爲三物之總要蓋精神不缺而後格調可得高體裁可得佳盛唐之詩主興趣興趣亦由此精神而出要認此所在須求之冥想中而後得之冥想者何也若聞古人之詩而默會其意若觸述作之境而潛理其旨此默會潛理之間總名之曰冥想如何求精神於此中蓋冥想恍惚之間天地位焉萬物備焉隨感而現隨

夫れ詩に體裁あり格調あり精神あり而して精神は三物の總要たり蓋精神缺けずして而して後に格調高きを得べし體裁佳を得べし盛唐の詩は興趣を主とす興趣も亦此精神に由て出づ此の在る所を認めんと要せば須く之れを冥想中に求め而して後に之れを得べし冥想とは何ぞや古人の詩を聞きて其意を默會するか若き述作の境に觸れて而して其旨を潛理するが若き此默會潛理の間總て之れを名けて冥想と曰ふ如何しか精神を此中に求めん蓋冥想恍惚の間天地位し萬物備はる感に隨て現し念に隨て變ず此感念を主る者即謂はゆる精神なり其物の情狀を靜察訂觀すとも蓋

念而變、主此感念者、即所謂精神也、靜察訂觀其物情狀、蓋與平生應外之作用、有不同、應外之作用者、旋轉旋易、動止無常、而無時而不存、如冥想中之精神、乃不然、方其感現之時、其人必須繼志、緝意、念念相續、以執持之、以觀玩之、而後始得長存、此其異也、作家之詩、字字不離此境、句句不違此界、念念相續、以執持之、以鼓盪之、爲歌詩、况兮有象、惚兮有理、於是咏之可聽、諷之可發、而拙者一一反此、文理皆失、陰陽皆訛、不可不知也。

凡詩之篇章字句、皆所用以繼緝而存存者也、古人動曰、篇章字句各有其法、以余觀之、篇章字句何嘗有別法、亦皆不外此存存之業、爾學者苟能參透此旨、則於談詩之書、皆

平生外に應ずるの作用と、同じからざるあり、外に應ずるの作用は、旋轉し旋易る、動止常なくして而して時として存せざることなし、冥想中の精神の如きは、乃然らず、其感現の時に方りて、其人必須く志を繼ぎ意を緝めて、念々相續ぎ、以て之れを執持し、以て之れを觀玩して、而して後に始めて長存することを得べし、此れ其の異なり、作家の詩、字々此境を離れず、句々此界に違はず、念々相續で、以て之れを執持し、以て之れを鼓盪して、歌詩と爲る、悦として象あり、惚として理あり、是に於て之れを咏じて聽く可く、之れを諷じて發すべし、而して拙き者は一々此に反す、文理皆失ひ、陰陽皆訛る、知らざるべからざるなり。

凡、詩の篇章字句、皆用ひて以て繼緝して存々する所の者なり、古人動もすれば曰、篇章字句、各其法ありと、余を以て之れを觀るに、篇章字句、何ぞ嘗て別法あらん、亦皆此存々の業に外ならざるのみ、學者苟能く此旨を參透せば、則詩を談するの書に於て、皆以て復た其之れを讀むことを求むるを待たざるべし。

可以不復待其求讀之矣。

凡詩之所吟、天地萬物、大約有四、曰色、曰狀、曰物、曰位、在易曰、爻等物文、卽亦是物也、而此四者之別、大抵從目感者皆色、依體而別者皆狀、因有而玩者皆物、就在爲地者皆位也、是故雖秋毫之末、有時皆爲位、雖虛空之無物、有時乎皆可言之色、狀、蓋所以分其四物者、其本在我、而初不在彼也、而言之之法、勿搪突、勿重複、勿闕而又開、勿闔而又閉、勿有頭而無尾、勿有上而無下、勿俄大俄小、勿言彼未盡而遽及此、勿言外未周而卻及內、凡如此類不遑枚舉、但透悟者拈來皆是。

凡學作詩、先欲多誦得古詩、其工夫有三、一、要口頭朗誦來、二、要將其所朗誦得來之詩

凡詩の吟する所、天地萬物大約四あり、曰色、曰狀、曰物、曰位、易に在りて爻等物文と曰ふ、卽亦是の物なり、而して此四の者の別、大抵目に從つて感する者は皆色、體に依りて別つ者は皆狀、有に因て玩ぶ者は皆物、在に就て地と爲る者は皆位なり、是故に秋毫の末と雖、時ありて皆位となる、虛空の無物と雖、時ありてか皆之れが色、狀を言ふべし、蓋其四物を分つ所以の者は、其本、我に在りて、初めより彼に在らざるなり、而して之れを言ふの法、搪突なる勿れ、重複なる勿れ、闕いて又開くこと勿れ、闔ちて又閉づること勿れ、頭ありて尾なきこと勿れ、上ありて下なきこと勿れ、俄に大俄に小なること勿れ、彼を言ふこと未だ盡くさずして遽に此れに及ぶこと勿れ、外を言ふこと未だ周からずして卻つて内に及ぶこと勿れ、凡此の如きの類枚舉するに遑あらず、但透悟する者拈し來る皆是なり。

凡詩を作することを學ぶに、先、多く古詩を誦し得んことを欲す、其工夫三あり、一には口頭に朗誦し來らんことを要す、二には其朗誦し得來る所の詩意景象、及篇章闕闕

「意、景象、及篇章開闔之法、而默存在心、三、要、就、心頭所記景象及意思、而別與之擬議一遍、不必把筆書出、而但要在心頭、運思擬議一遍、每誦一詩、必下此三段工夫、至積多篇而後始自去作自己之詩、仍是宛然古人之聲口。

凡詩中所言之景象意思、其別大約有二、其一參飄忽變動之象者是也、其一參永久固定之境者是也、參飄忽之象者、其風雲雪月、倏來旋滅、其色眩爛、使視聽者、意想爲之不安、驟見可喜、而久之生厭心、參永久固定之境者、其山川草木、取象深遠、其情優柔、置辭不促急、使視聽者三復致思不已、此是立象動靜之別、不可不審擇也。

四
の法を將て、而して默存して心に在らんことを要す、三には心頭に記する所の景象及意思に就て、別に之れが與に擬議一遍せんことを要す、必しも筆を把りて書き出さずして、但に心頭に在りて運思擬議一遍せんことを要す、一詩を誦する毎に、必此の三段の工夫を下し、多篇を積むに至りて、而して後に始めて自ら去りて自己の詩を作れば、仍是れ宛然たる古人の聲口なり。

凡詩中言ふ所の景象意思、其別大約二あり、其一は飄忽變動の象を參ふる者はなり、其一は永久固定の境を參ふる者はなり、飄忽の象を參ふる者は、其風雲雪月、倏ち來り旋て滅し、其色眩爛、視聽する者をして意想此れか爲に安からず、驟に見て喜ぶ可く、而して之れを久ふして懸心を生せしむ、永久固定の境を參ふる者は、其山川草木象を取ること深遠、其情優柔にして、辭を置くこと促急ならず、視聽する者をして三復思を致して已まざらしむ、此は是れ象を立つる動靜の別、審に擇ばざるべからざるなり。

精神亦有動靜之別、昔人稱王維詩中有畫、畫中有詩、自有是語以來、世人效襲、每見人詩句巧寫景致者、輒贊之以如畫、而作詩者亦當其鍛鍊句煉字之時、務要使己所言如畫、殊不知王維佳處、本不止於曰如畫、且曰如畫、未如曰逼真也、蓋如畫則其佳處、乃未過布景點色之美、而逼真則更無天趣、如畫即其布置結構、自然有限於邊幅之患、而逼真即其布置結構、自然有雋永之味、有無窮之思、有活動之機、是故定象莫善、尙靜寓精神、莫善尙動。

鍛鍊句字、人往往善言之、而及叩之以其所、以鍛鍊之故、則茫然莫辨、殊不知其所以、必用鍛鍊者、亦唯象與精神之故也、蓋凡作詩

精神も亦動靜の別あり、昔人稱す、王維は詩中に畫あり、畫中に詩ありと、是語ありてより以來、世人輩に效ひ、人の詩句、景致を巧寫する者を見る毎に、輒之を贊するに畫の如きを以てす、而して詩を作る者も、亦其鍛句煉字の時に當りて、務めて己が言ふ所をして畫の如くならしむるを要す、殊に知らず王維が佳處、本畫の如しと曰ふに止らず、且畫の如しと曰ふは、未だ眞に逼ると曰ふに如かざるなり、蓋畫の如くなれば、則其佳處、乃未だ景を布き色を點するの美に過ぎず、而して眞に逼るは、則更に天趣を兼ぬ、畫の如きは、即其布置結構、自然に邊幅に限らざるの患あり、而して眞に逼るは、即其布置結構、自然に雋永の味ありて、無窮の思あり、活動の機あり、是故に定象は、靜を尙ぶより善きはなし、精神を寓するは、動を尙ぶより善きはなし。

句字を鍛鍊すること、人往々善く之れを言ふ、而して之れを叩くに其の鍛鍊する所以の故を以てするに及んで、則茫然辨することなし、殊に知らず、其の必鍛鍊を用ふる所以の者は、亦唯象と精神との故なることを、蓋凡、

未成一語之先、必立以象、象立則精神寓焉、而其爲物也、窈然冥然、倏然忽然、於是心爲之生、哀感情爲之發、永歎於是、是文辭以明之物象、和聲以平其所聽、詩蓋於是乎始成、是故其語未切、物象者、必改造之、務以使凱切、其文未當、物象者、必換易之、務以使允當、此古人鍛句鍊字之要旨也、然學者晚進、或不能審此義、篇章字句、不論權衡、妄改妄換、一取綺麗、不知其卻以累全篇也、而猶自謂善鍛鍊矣、我不知其書點幾黃金、以爲瓦礫、也可歎甚矣。

詩家用字貴平常、而不貴奇僻、押韻貴平易、而不貴艱險、使事貴用熟故、而不貴出新異、此三者何以然乎、亦不欲以累象及精神也、

詩を作る未だ一語を成さざるの先、必立つるに象を以てす、象立てば則精神寓す、而して其物たるや、窈然冥然、倏然忽然、是に於て心之れが爲に哀感を生じ、情之れが爲に咏歎を發す、是に於て文辭以て之れか物象を明にし、和聲以て其聽く所を平にす、詩蓋はに於てか始めて成る、是の故に其語未だ物象に切ならざるものは必之れを改造し、務て以て凱切ならしむ、其文未だ物象に當らざる者は、必之れを換易し、務て以て允當ならしむ、此れ古人鍛句鍊字の要旨なり、然るに學者晚進、或は此義を審にすること能はず、篇章字句權衡を論ぜず、妄に改め妄に換へ、一に綺麗を取る、知らず其卻て以て全篇を累はすことを、而して猶自ら謂ふ善く鍛鍊すと、我知らず、其嘗て幾黄金を點して以て瓦礫と爲せることを、歎すべきこと甚し。

詩家、字を用ふる、平常を貴んで、而して奇僻を貴びず、押韻、平易を貴んで、而して艱險を貴びず、事を使ふ、熟故を用ふることを貴んで、而して新異を出すことを貴びず、此三者は何を以て然るや、亦以て象及精神を累はすこと

立象寓神、譬之内氣血也、用字押韻使事、譬之外肌膚也、肌膚無所病於外、而氣血旺於内、外有所牽滯、内必爲昏慣、是故字之奇僻、韻之艱險、事之新異、譬猶美疾愈美愈害。

連熟字面、或有宜用於五言、而不宜用於七言、其辭意頗促急者、宜用於五言、不宜用於七言、大抵五言語短、用字不妨意急節促、而七言稍長、語勢動苦弛散、若雜意急節促之字面、一句之間、一曼一促、調之甚難、不可不辨也、同是七言、而古律絕已異、其體則其調之之法、亦各有其所宜、律句要渾圓而有力、古詩句要流暢而宕、絕句要含蓄有餘響、五言做此。

明鍾伯敬詩歸批評、擊節於奇譎、而不比於

洪園詩話

を欲せざるなり、立象寓神、之れを内氣血に譬ふ、用字押韻使事、之れを外肌膚に譬ふ、肌膚外に病む所なくして、而して氣血内に旺す、外牽滯する所あれば、内必昏慣を爲す、是故に字の奇僻、韻の艱險、事の新異、譬は猶美、疾の愈美にして愈害あるがごとし。

連熟の字面、或は宜く五言に用ゆべく、而して七言に用ゆべからざるあり、其辭意頗促急なる者、宜く五言に用ゆべく、七言に用ゆべからず、大抵五言は語短し、字を用ふること意急に節促なるを妨げず、而して七言は稍長し、語勢動もすれば弛散を苦しむ、若し意急節促の字面を雜ゆれば、一句の間、一曼一促、之れを調ふること甚難し、辨ぜずんばあるべからず、同じく是七言にして、而して古律絶已に其體を異にすれば、則其之れを調ふるの法、亦各其宜しき所あり、律句は渾圓にして而して有力なるを要す、古詩の句は、流暢にして而して宕ならんことを要す、絶句は、含蓄にして餘響あらんことを要す、五言は之れに做へ。

明の鍾伯敬が詩歸批評、節を奇譎に擊つて、而して正雅

七

正雅、初學讀之、貽害不小、蓋古人之作、間亦有奇譎者、然竝皆其正雅之餘、十僅出一二而已、固非以新奇爲標的也、詩歸之所選、乃聚鶴而冠、頭頭是邪路、尤當戒之迷陷者也、綺麗之弊、必之纖弱、昔賢往往論之、而近時人士、雖或知其弊、而不肯遷棄、譬猶牽戀聲色之人、不復顧其身也、聞其所言、乃云詩奇、與而足、何必論體格之高卑、余曰、此故遁辭、蓋其人已事綺麗、豈寄興而足者哉、杜甫嘗有言、多見翡翠蘭苕上、未製鯨魚碧海中、據此少陵、未以綺麗爲當行也、夫古今詩人、未有不宗少陵者、雖以元輕白俗、亦靡有異論、則何必論體格之高卑之言、余恐雖元白、亦恥作此語、蓋格力不高者、未足以製鯨魚於

に比せず、初學之れを讀めば、害を貽すこと小ならず、蓋古人の作、間亦奇譎なる者あり、然れども竝に皆其正雅の餘十に僅に一二を出だすのみ、固より新奇を以て標的とするに非ず、詩歸の選ぶ所は、乃鶴を聚めて冠す、頭々是れ邪路、尤當に之れが迷陷せんことを戒むべきなり。

綺麗の弊、必纖弱に之く、昔賢往々之れを論ず、而して近時の人士、或は其弊を知ると雖、而して肯て遷棄せず、譬へば猶聲色に牽戀する人、復其身を顧みざるがごとし、其言ふ所を聞くに、乃云ふ、詩は興を寄せて而して足る、何ぞ必しも體格の高卑を論ぜんやと、余曰、此れ故遁辭、蓋其人已に綺麗を事とす、豈興を寄せて足れりとする者ならんや、杜甫嘗て言へることあり、多く翡翠を蘭苕の上に於て、未だ鯨魚を碧海の中に掣かずと、此に據るに少陵は未だ綺麗を以て當行と爲さず、夫古今の詩人、未だ少陵を宗とせざる者あらず、元輕白俗を以てすと雖、亦異論あることなきときは、則何ぞ必しも體格の高卑を論じて之れ言はん、余恐くは元白と雖、亦此語を作さんことを恥ぢん、蓋格力高からざるもの、未だ以て鯨魚を碧海に掣くに足らず。

碧海也。

初盛中晚四唐之別、其風格各異、本不得相同、近有人欲混而一之、可謂不能辨菽麥者矣、明一代詩人、務摛擬於盛唐、而優孟竟與翼叔敖不相近、蓋風度雖類、而精神大遠、明人志氣輕佻、而語皆促迫、盛唐之人、志氣安舒、而語皆優柔、雖言時風不同、而要之、明人於唐詩、失之皮相故也。

唐人聲律未甚嚴、而宋人已降拘束日甚、殊不知古韻多三聲相通用、如宋禮部韻、本非唐人之舊也、後世乃奉之、殆如金科玉條、豈非可笑之甚、詩話載、宋秦少游詩律極嚴、當時譏其入小石調、據此、則宋人聲律、尙未甚極、其嚴、至明李攀龍輩、苛刻嚴急、不容細過、

初盛中晚、四唐之別、其風格各異にして、本相同じきことを得ず、近ごろ人あり混じて之れを一にせんと欲す、菽麥を辨ずること能はざる者と謂ふべし、明一代の詩人、務めて、盛唐に摛擬す、而して優孟竟に眞の叔敖と相近からず、蓋風度類すとす雖、而して精神大に遠し、明人は志氣輕佻にして、而して語皆促迫、盛唐の人は、志氣安舒にして、而して語皆優柔、時風同じからずと言ふと雖、而して之れを要するに、明人の唐詩に於ける、之れを皮相に失するが故なり。

唐人は聲律未だ甚嚴ならず、而して宋人已降、拘束日に甚し、殊に知らず古韻多くは三聲相通用することを、宋の禮部韻の如き、本唐人の舊に非ず、後世乃之れを奉じて、殆と金科玉條の如くす、豈笑ふべきの甚しきに非ずや、詩話に載す、宋の秦少游詩律極めて嚴、當時其小石調に入るを譏る、此れに據れば、則宋人の聲律、尙未だ甚其嚴を極めず、明の李攀龍が輩に至りて、苛刻嚴急、細過を容れず、其意、蓋人の或は之れを指摘せんことを恐る、殊

其意蓋恐人或指摘之也、殊不知詩本吟詠性情、略調聲律、可歌則可矣、人或指摘其餘、要之彼人未達之故爾、本非已所傷也、李攀龍輩、不知其當作、如是觀、而拘拘東東、殆如小禪縛律、是以其詩不唯聲律嚴急、而辭氣亦促迫、此皆未究其本之過也。

凡學作詩、當先從七言始、七言長、五言短、作長已熟、則短自在其中矣、其於體、當先從絕句始、絕句用辭不多、篇法易習之、已熟、則雖古詩律體、篇法既亦皆成於其中矣。

學作絕句、始先作三四、既因其三四、而學作之起承、務令其意旨前後接應、可以連續成篇、及稍熟、而後乃始作從一二起、初學必須從三四作起者、譬猶棊先置勢子、勢子已定、

に知らず、詩は本性情を吟詠す、略聲律を調へ、歌ふべきときは則可なり、人或は其餘を指摘す、之れを要するに彼人未だ達せざるの故のみ、本と己が傷む所に非ず、李攀龍が輩、其當に是の如き觀を作すべきを知らず、而して拘々東々、殆ど小禪縛律の如くす、是を以て其詩唯に聲律嚴急なるのみならず、而して辭氣も亦促迫せり、此れ皆未だ其本を究めざるの過なり。

凡詩を作ること學ぶには、當に先づ七言より始むべし、七言は長し、五言は短し、長を作すこと已に熟するときは、則短、自ら其中に在り、其體に於ける、當に先づ絶句より始むべし、絶句は辭を用ふることに多からずして、篇法易し、之れを習ふこと已に熟するときは、古詩律體と雖、篇法既に亦皆其中に成る。

絶句を作るとしてを學ぶは、始め先づ三四を作り、既にして其三四に因て、而して之れが起承を作るとを學ぶ務めて、其意旨をして前後接應せしめ、以て連續して篇を成すべし、稍熟するに及んで、而して後に乃始めて作ると一二より起す、初學は必須く三四より作り起すべしと

而後開闔離合、始可論其法也、不則漫然作去、雖累數千篇、而終不能長進、徒枉費歲月而已。

相如三月、枚臯一日、文思遲速、自古有不同、然余性遲鈍、詩思甚困、因嘗學捷作、數月始得其法、蓋始先作七言絕、每首限以線香一寸、初作之甚難、而有或殆不能成語者、然強作之漸久熟、乃復換以五言律、既復換以七言律、亦初皆不能成語、及稍熟、則必至從容有餘思、而雖走筆疾書、間復出佳語、乃其藝之已成也、而其要訣、乃在韻脚、韻脚定、則句亦速成、故一轉念間、能憶各韻之字七八字、乃至九十字、則詩莫不速就也、然而此捷作之詩、本唯所逐字逐韻而成、所謂逐景生情

は譬へば猶、棊の先づ勢子を置き、勢子已に定まりて、而して後、開闔離合して始めて其法を論すべきがごとし、不ずして漫然として作り去らば、數千篇を累ぬと雖、而して終に長進する能はず、徒に歲月を枉費するのみ。

相如が三月、枚臯が一日、文思の遲速、古より同じからざるあり、然れども余性遲鈍、詩思甚困む、因て嘗て捷作を學ぶ、數月にして始めて其法を得たり、蓋始め先づ七言絶を作る、每首限るに線香一寸を以てす、初め之れを作ること甚難し、而して或は殆んど語を成すこと能はざる者あり、然れども強て之れを作る、漸く久ふして熟す、乃復換ふるに五言律を以てす、既にして復換ふるに七言律を以てす、亦初め皆語を成すこと能はず、稍熟するに及べば、則必從容として餘思あるに至る、而して筆を走らして疾く書すと雖、間復佳語を出だす、乃其藝の已に成るなり、而して其要訣は、乃韻脚に在り、韻脚定れば、則句亦速に成る、故に一轉念の間、能く各韻の字七八字を憶し、乃至九十字に至れば、則詩速に就らざることなし、然り而して此捷作の詩、本唯、字を逐ひ韻を逐ふて而して成る所、謂はゆる景を逐ひ情を生ずるの類、之れを思を經

之類、視之經思鍛鍊者、究竟有間矣、但初學之人、學此捷作、而筆頭得文字三昧、則作詩可免於造語之艱苦、於是始去入於鍛鍊、則一思一念有數百文字、隨之而轉、雖一思一念、無虛想頭、其所益亦甚多矣、此亦不可不以學也、但捷作之詩、雖佳者、意思淺、晚唐蓋多捷作者。

登高能賦、自古稱之、蓋人一到景物夷曠之境、平日之文思、頓減一半、無他、乃情爲景奪、故耳、余有一法、可以保護我文思、使不隨境而轉也、每到景物夷曠之境、或欲有所賦、我先閉精斂神、盡收其景物、歸之冥想、而就冥想中、擇情所愜會、繼以文字寫之、景象、則雖以萬里之寥曠、吾或可一言以領略之也、而

て鍛鍊する者に、くらむ視るに、究竟間あり、但、初學の人、此の捷作を學んで、而して筆頭文字三昧を得れば、則詩を作るに、語を造すの艱苦を免る可し、是に於て、始めて去つて鍛鍊に入れば、則一思一念、數百の文字ありて、之れに隨つて轉ず、一思一念と雖、虛想頭なく、其益する所亦甚多し、此亦以て學ばずんばあるべからず、但、捷作の詩は、佳なる者と雖、意思淺し、晚唐には、蓋捷作者の者多し。

高きに登りて能く賦す、古より之れを稱す、蓋人、一たび景物夷曠の境に到りては、平日の文思、頓に一半を減す他なし、乃情は景に奪はるゝが故のみ、余、一法あり、以て我が文思を護りて、境に隨つて而して轉ぜざらしむるを得べし、景物夷曠の境に到る毎に、或は賦する所あらんと欲すれば、我れ先づ精を閉ぢ神を斂め、盡く其景物を收めて之れを冥想に歸し、而して冥想の中に就いて、情の愜會する所を擇び、繼ぐに文字を以て之が景象を寫す、則萬里の寥曠を以てすと雖、吾れ或は一言以て之

此法亦非自余始有之、而人苟有賦咏、篇篇首首、總皆以此法、但人獨能知心設虛象、文字實之、而未知實景又當歸之虛象耳。

凡學作詩、須先多誦古人之詩、又須將其所誦之詩、一一皆領解透徹其意旨、蓋誦以參其調、領解以參其格、格調既習、而後可得、以參其法、未得參其法、則雖欲揚擯之、亦將何以乎、輕俊子弟、耳食相和、猥品千古、漢唐必佳之、宋元鄙之、以佳鄙二字、概而論之、不復究求其故、是以妄稱妄舉、權衡皆失矣、若此何以進步、學者不可不以自戒也。

學詩須先多知詩家熟用文字、當須每字蒐集古人用例、以精辨其義、字義已熟、而後以廣解古人之詩、既得解了、則其目中必已能

を領略す可きなり、而して此法も亦余より始めて之れ有るに非ず、而して人苟賦咏することあれば、篇々首々總て皆此法を以てす、但、人獨能く心に虛象を設けて文字之れを實にすることを知りて、而して未だ實景又當に之を虛象に歸すべきを知らざるのみ。

凡詩を作るとを學ぶには、須く先づ多く古人の詩を誦すべし、又須く其誦する所の詩を將て一々皆其意旨を領解透徹すべし、蓋誦して以て其調を參し、領解して以て其格に參す、格調既に習ふて、而して後、以て其法を參ふることを得べし、未だ其法を參ふるとを得ざれば、則之を揚擯せんと欲すと雖、亦將た何を以てせんや、輕俊子弟耳食相和し、猥りに千古を品し、漢唐は必之れを佳とし、宋元は之れを鄙とす、佳鄙の二字を以て概して之れを論じ、復其故を究求せず、是を以て妄りに稱し、妄りに擧げ、權衡皆失す、此の若くんば何を以て歩を進めん、學者以て自ら戒めずんばあるべからず。

詩を學ぶには、須く先づ多く詩家熟用の文字を知るべし、當に須く每字、古人の用例を蒐集して、以て其義を精辨すべし、字義已に熟して、而して後に、以て廣く古人の詩を解す、既に解了することを得れば、則其目中必已に能

辨之巧拙佳否、詩蓋至是始可與商論矣、而所謂鍛鍊之手段、至是始亦可以點化瓦礫作黃金矣。

嚴滄浪云、劉公幹贈五官中郎將詩、昔我從元后、整駕至南鄉、過彼豐沛都、與君共翱翔、元后蓋指曹操、至南鄉謂伐劉表之時、豐沛都喻操譙郡也、王仲宣從軍詩云、籌策運帷幄、一由我聖君、聖君亦指操也、又曰、竊慕負鼎翁、願厲朽鈍姿、是欲效伊尹負鼎于湯以伐夏也、是時漢帝尙存、而二子之言如此、一曰元后、一曰聖君、正與荀彧比曹操爲高光同科、春秋誅心之法、二子其何逃、按此論甚正、二子固無所逃其罪矣、然而後世詞人文尙褒溢、辭務侈大、則其於名號稱謂之類、往

く之が巧拙佳否を辨ず詩蓋是に至りて、始めて與に商論すべし、而して謂はゆる鍛鍊の手段、是に至りて始めて亦以て瓦礫を點化して黃金と作すべし。

嚴滄浪云ふ、劉公幹が五官中郎將に贈る詩に、昔我れ元后に從ひ、駕を整へ南郷に至る、彼の豐沛の都を過ぎ、君と共に翱翔せん、元后は蓋曹操を指す、南郷に至るは、劉表を伐つの時を謂ふ、豐沛の都は、操が譙郡に喻ふるなり、王仲宣が從軍の詩に云ふ、籌策帷幄に運らす、一に我が聖君に由る、聖君亦操を指す、又曰、竊に負鼎の翁を慕ふ、願くば朽鈍の姿を厲まさん、是尹伊、鼎を負ひ湯を干し、以て夏を伐つに效はんと欲す、是時漢帝尙存す、而して二子の言此の如し、一は曰、元后、一は曰、聖君、正に荀彧、曹操を比して高光と爲すと科を同うす、春秋誅心の法、二子其れ何ぞ逃れん、按するに、此論甚正し、二子固に其罪を逃るゝ所なし、然り而して後世詞人、文褒溢を尙び、辭、侈大を務む、則其名號稱謂の類に於て、往々溢妄にして、其等階を過ぐ、此れ等の弊、皆痛く改めずんばあるべからず。

往滯妄過、其等隨此等之弊、皆不可不痛改也。

盛唐諸人之詩、規模皆宏遠、而意思皆著實、譬猶廟廷宮懸、金聲玉振、而餘韻無窮、如杜甫秋興、千家山郭靜朝暉、日日高樓坐翠微、日日字、固雖爲下言、信宿漁人作地者、然非規模宏遠、決不能下此二字、如賈至早朝、銀燭朝天紫陌長、長字乃見銀燭衆多、如崔顥黃鶴樓、昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、直將黃鶴樓頭一千年來雲物景象、僅以七言四句、模寫盡、其規模宏遠、率皆此類也、意思著實、乃前所謂參永久固定之境者、卽是也、如千家山郭句、驟讀只謂此唯泛然寫山郭朝景、

盛唐諸人の詩、規模皆宏遠にして、而して意思皆著實、譬へば廟廷の宮懸金聲玉振して、而して餘韻窮まりなきがごとし、杜甫が秋興の如き、千家山郭朝暉靜なり、日々高樓翠微に坐す、日々字、固下に漁人に信宿せるを言はんが爲に地を作す者と雖、然れども規模宏遠に非ずんば決して此二字を下すと能はず、賈至早とに朝するが如き、銀燭天に朝して紫陌長し、長の字、乃銀燭の衆多を見る、崔顥が黃鶴樓の如き、昔人已に白雲に乗じて去る、此地空く餘す黃鶴樓、黃鶴一たひ去りて復返らず、白雲千載空しく悠悠、直に黃鶴樓頭一千年來の雲物景象を將て、僅に七言四句を以て、模寫し盡くす、其規模宏遠、率皆此の類なり、意思著實、乃前に謂はゆる永久固定の境に參ふる者、卽是なり、千家の山郭の句の如き、驟に讀めば只に謂ふ、此唯泛然として山郭の朝景を寫すと、知らず作者心を苦しめて、特に添ふるに千家の二字を以てするを、然して後に以て見る望中民合織るが如く、街衢棊の如く、朝光正に滿ち、卻て自ら靜閑、稀に車馬人物往

不知作者苦心、特添以千家二字、然後以見望中民舍如織、街衢如棊、朝光正滿、卻自靜闐、稀見車馬、人物往來走動之景狀者也、如賈至句言銀燭朝天、即陪寫紫陌、然後以得想見來多銀燭、照耀如星、成行列焉、如崔顥詩、即其已字空字、先捉定寥落千古、卻更借言雲物、以點其中間日之景象、其意思著實、率皆此類也、餘韻無窮、譬如沈宋同賦、昆明池詩、上官昭容定之優劣、必以沈爲上、可見雖初唐、風尚已然、而當時詩人、亦皆有意作之、而莫不求其詩有餘韻也矣。

精神譬偃師木偶也、文字譬偃師木偶機絲機輪也、機絲能長短相順應、機輪能大小相推轉、則木偶起舞、自中節奏矣、人或務施采

來走動之景狀を見る者なるを、賈至が句に銀燭天に朝すと言ふが如き、即紫陌を陪寫し、然して後に以て衆多の銀燭照耀、星の如く行列を成すを想見するを得、崔顥の詩の如き、即其已字、空字、先づ寥落たる千古を促定し、卻て更に雲物を借り言ふて、以て其中間日々の景象を點す、其意思著實、率皆此類なり、餘韻窮まり無しとは、譬へば沈宋が同じく昆明池を賦する詩の如き、上官昭容之れが優劣を定む、必、沈を以て上と爲す、見るべし、初唐と雖風尚已に然るを、而れども當時の詩人亦皆意ありて之を作る、而して其の詩、餘韻あらんことを求めざるはなし。

精神は譬へば偃師が木偶なり、文字は譬へば偃師が木偶の機絲機輪なり、機絲能く長短相順應し、機輪能く大小相推轉すれば、則木偶起舞して、自ら節奏に中る、人或は務めて采を機絲に施し、而して畫を機輪に雕して、而し

於機絲、而雕畫於機輪、而木偶乃手拘足礙、或乃節節顛仆、而猶不能知其當改、可笑。

盛唐諸人作樂府詩、皆欲其入於歌詠、是以規模務宏遠、意思務著實、收結務有餘韻、雖其應酬贈送閑適游覽之作、未必入歌詠者、亦皆總帶此意思、而其樂府佳者、果亦皆入於歌詠、小說所載王之渙、黃河遠上白雲間、爲麗妓所歌、李白清平調、直入內宴檀板之類、不遑枚舉、中唐此風尙盛、至白居易、更欲其愜於俗聽、每作一詩、必先令家中老嫗聽之、而其所難解者、輒改之、於是詩體一變、鄙俚滿篇、而雅響正音掃地而盡矣、然晚唐李賀七言歌行、尙入窳栗平調、則可見唐一代詩人、皆亦莫不以其入歌詠爲主矣、宋元以

て木偶は乃手拘して足礙し、或は乃節々顛仆す、而るに猶其當に改むべきを知ることは能はず、笑ふ可し。

盛唐の諸人樂府の詩を作る、皆其歌詠に入らんことを欲す、是を以て規模は宏遠を務め、意思は著實を務め、收結は餘韻あらんとを務む、其應酬贈送し、閑適游覽の作、未だ必しも歌詠に入らざる者と雖、亦皆總て此意思を帶ぶ、而して其樂府の佳なる者、果して亦皆歌詠に入る、小説に載する所、王之渙が黃河遠く上る白雲の間、麗妓の歌ふ所と爲り、李白が清平調直に内宴の檀板に入るの類、枚舉するに遑あらず、中唐此風尙盛んに、白居易に至りて、更に其俗聽に愜はんことを欲す、一詩を作る毎に、必先づ家中の老嫗をして之れを聽かしめ、而して其解し難き所の者は、輒之れを改む、是に於て詩體一變し、鄙俚篇に滿ち、而して雅響正音、地を掃ふて盡く、然れども晚唐李賀七言歌行、尙窳栗平調に入る、則見るべし、唐一代の詩人、皆亦其歌詠に入るを以て主と爲さざるはなし、宋元以來詩歌分行して、而して詩竟に啞鐘の如く、徒に觀覽に供するのみ、降りて明人に至りて、巧を飾辭に競ひ、博を用事に誇る、調峻に辭急に、意短に、氣佻なり、殆、謂

來詩歌分行、而詩竟如陘鐘、徒供觀覽耳、降
至明人、競巧於飾辭、誇博於用事、調峻辭急、
意短氣促、殆所謂五降之後、不容彈者矣。

盛唐詩人用事、不過欲自明其情、援舊事與
相類者、以言之爾、明人用事、先自有意於詩、
已博覽、一言一語、必由典故、雖不相類者、亦
以情遷就、輕薄莫甚焉、古人亦有一言一語
必由典故者、五言排律間見之、而至以情遷
就者、斷無有斯法矣。

盛唐人喜用地名、而其他地方皆世所著聞者、而
至僻遠者、名稱雖佳、亦罕入詩料、蓋亦不欲
以累象及精神也、近時詩人不問地之著否、
而字稍不俗、即輒充採用、甚者乃至擅自換
易其名、以用之、而讀者必再三詰問之、然後

はゆる五降の後、彈すべからざる者なり。

盛唐の詩人事を用ふる、自ら其情を明にせんと欲するに
過ぎず、舊事の與に相類する者を援て以て之れを言ふの
み明人の事を用ふる、先づ自ら己れが博覽に誇るに意
あり、一言一語、必典故に由る、相類せざる者と雖、亦情を
以て遷就す、輕薄焉れより甚しきは莫し、古人も亦、一言
一語、必典故に由る者あり、五言排律間、之れを見る、而
して情を以て遷就する者に至りては、斷じて斯法ある
ことなし。

盛唐の人喜んで地名を用ふ、而れども其他皆世の著聞す
る所の者、而して僻遠なる者に至りては、名稱佳なりと
雖、亦詩料に入ること罕なり、蓋亦以て象及精神を累は
すことを欲せざるなり、近時の詩人、地の著否を問はず、
而して字稍俗ならざれば、即輒採用に充つ、甚しき者は
乃擅に自ら其名を換易して以て之れを用ふるに至る、而
して讀者必再三之れを詰問して、然る後に始めて是れ其
地を言ふ者なるを知ることを得るなり、唉ふべきこと甚

始得知是言其地者也、可咲甚矣。

有一士人、作詩辭皆尙典實、嘗作春日仁和寺賞花詩曰、青帷半褰映、鮎紅、鈿櫨朱杯落日中、莫怪三絃調、偏苦櫻花如雪點、春風或難之、云今所用酒器是盞、非杯也、仁和寺花乃漢土所無、謂之櫻者亦誤矣、士人不能答、卽裂其詩而棄之、亦可咲。

王昌齡、秦時明月漢時關、明月二字殊似、無著落、明王世貞讀之、不能得其解、卽云、詩妙在可解不可解之間、夫世豈有以不可解而爲詩者邪、然此言一出、後進皆惑、務出可解不可解之言、是以當時詩篇、大率皆是醉人嚶語矣、而殊不知龍標此語、乃本於楊炯望斷流星驛心馳明月關者也。

し。

一士人あり、詩を作る、辭皆典實を尙ぶ、嘗て春日、仁和寺にして花を賞する詩を作る、曰、青帷半褰けて鮎に映じて紅なり、鈿櫨朱杯落日の中、怪むこと、莫れ三絃調偏に苦めることを、櫻花雪の如く春風に點す、或ひと之れを難じて云ふ、今用ふる所の酒器は、是れ盞にして杯に非ず、仁和寺の花は、乃漢土の無き所之れを櫻と謂ふは亦誤れりと、士人答ふること能はず、卽其詩を裂きて之れを棄つ、亦咲ふべし。

王昌齡の、秦時の明月漢時の關、明月の二字殊に著落なきに似たり、明の王世貞、之れを讀んで其解を得ること能はず、卽云ふ、詩の妙は解すべく解すべからざるの間に在りと、夫れ世豈解すべからざるを以て而して詩と爲す者あらんや、然して此言一たび出で、後進皆な惑ひ、務めて解すべく解すべからざるの言を出だす、是を以て當時の詩篇、大率皆是れ醉人の嚶語なり、而して殊に知らず、龍標が此語、乃楊炯が、望は斷流星驛、心は馳す明月關、といふに本づく者なるを。

李白清平調三首、不唯其調、而其詩所命意、乃亦專言清平、蓋瑤臺月下等語、皆爲清字、寫其神者也、第三首、專言平、乃解釋春風、無限之句、爲平字、寫其情者也、第二首、乃欲調停兩首之意、以使相貫承、故於其中間、又添置此一首者耳、則不止其辭絕妙、而全篇結撰奇拔更甚、惜前人說此詩者、尙未論及是旨也。

詩有不易解者、如王維鳥鳴澗詩、人間桂花落、夜靜春山空、月出驚山鳥、時鳴春澗中、桂花落、卽是晚秋、言春山、又何以重言春澗也、如楊炯夜送趙縱詩、趙氏連城壁、由來天下傳、送君歸舊府、明月滿前川、趙氏壁、雖是因姓用事、二句畢竟不知、何以有此語、結末殊

李白清平調三首、唯其調のみならず、其詩意を命ずる所、乃亦専ら清平を言ふ蓋瑤臺月下等の語、皆清字の爲めに其神を寫す者なり、第三首専ら平を言ふ、乃解釋す春風限りなき恨の句、平字の爲に其情を寫す者なり、第二首、乃兩首の意を調停して以て相貫承せしめんと欲す、故に其中間に於て、又此一首を添置する者のみ、則止に其辭絶妙なるのみならず、而も全篇結撰奇拔更に甚し、惜むらくは前人此詩を説く者、尙未だ是の旨に論及せざるなり。

詩に解し易からざる者あり、王維が鳥鳴澗の詩の如き「人間桂花落ち、夜靜にして春山空し、月出で、山鳥驚き、時に鳴く春澗の中」と桂花落つ、卽是晚秋、春山と言ひ、又何を以てか重ねて春澗と言ふや、楊炯が夜趙縱を送る詩の如き、趙氏連城の壁、由來天下に傳ふ、君が舊府に歸るを送れば、明月前川に滿つ、趙氏壁は是姓に因て事を用語と雖、二句畢竟何を以てか此語あるを知らず、結末殊に其意の相接應するの處を見ず、且つ明月前川に滿つ、

不見其意相接應之處、且明月滿前川、亦將何解、如孟浩然送朱大之秦詩、分手脫相贈、平生一片心、何以言平生、何以心又言一片、如李白獨坐敬亭山詩、衆鳥高飛盡、孤雲獨去閒、相看兩不厭、只有敬亭山、夫目送飛鴻、心玩閒雲、自是韻事、何以忽有厭不厭之言也、此特舉五言絕句、而其他此類難解者甚多、試思此等解、亦是一適。

盛唐諸公、體格各別、少陵狀物情態皆切、而語皆有力、如捧巨岳於將崩回、洪流於方漲、青蓮置思於天地之外、而望物於杳渺之際、如憐歸鴻於雲表、惜落日於海垠、王維如望煙雨於青嶂、瞰霞彩於瞰江、李頎如行過絳嶺月下、杳聞笙聲鶴唳雲霄之際、崔顥如金

亦將に何とか解せんとす、孟浩然が朱大が秦に之くを送る詩の如き、手を分ち脱して相贈る、平生一片の心、何を以てか平生と言ひ、何を以てか心、又一片と言ふ、李白が敬亭山に獨坐すの詩の如き、衆鳥高く飛び盡くし、孤雲獨去りて閒なり、相看て兩ながら厭はざるは、只敬亭山あり、夫れ目飛鴻を送り、心、閒雲を遊ぶ、自らは是れ韻事、何を以てか忽厭ひ厭はざるの言あるや、此特に五言絶句を擧ぐ、而して其他此類解し難き者甚多し、試に此等の解を思ふ、亦是一適。

盛唐の諸公、體格各別なり、少陵は物を狀する、情態皆切にして、而して語皆力あり、巨岳を將に崩れんとするに捧へ、洪流を方に漲らんとするに回らすが如し、青蓮思を天地の外に置き、而して物を杳渺の際に望む、歸鴻を雲表に憐み、落日を海垠に惜むか如し、王維は煙雨を青嶂に望み、霞彩を澄江に瞰るが如し、李頎は行絳嶺月下を過ぎ、杳として笙聲鶴唳を雲霄の際に聞くが如し、崔顥は金龍日を迎へて、而して動き、體已に矯健にして、而

龍迎日而動、體已矯健、而偏身鱗甲無所不見、光怪矣、余別有律野之書、精辨諸家體格之別、今略摘其一二云。

晚唐之人、氣象衰頹、其詩率多只在文字上、設架子、譬如趙嘏江樓書感詩、獨上江樓思渺然、月光如水水連天、同來翫月人何處、風景依稀似去年、江樓風景、即月光如水水連天句也、獨上字與同來字、相反應、而去年同來、翫月人何處、即起句思渺然是也、此等詩、全篇二十八字、意思皆吐露、此外無甚餘蘊、只僅配列其文字平仄、以爲一首之詩耳、盛唐決無此等詩、如思渺然字、趙嘏只是不能、此外道著一語、若使盛唐諸公代作此詩、必能在此三字上、更下一段工夫、而以成一篇

して偏身鱗甲にして、光怪を見ざる所なきが如し、余別に律野の書あり、諸家體格の別を精辨す、今略して其二を摘すと云ふ。

晚唐の人、氣象衰頹、其詩率多くは只文字の上になりて架子を設く、譬へば趙嘏が江樓書感の詩の如き、獨江樓に上りて思渺然、月光、水の如く水、天に連なる、同じく來りて月を翫ぶ人何の處ぞ、風景依稀去年に似たり、江樓の風景、即月光水の如く水天に連るの句なり、獨、上の字同來の字と、相反應して、而して去年同く來り月を翫ぶ人何の處ぞ、即起句思渺然是なり、此等の詩、全篇二十八字、意思皆吐露、此外甚だ餘蘊なし、只僅に其文字平仄を配列して以て一首の詩と爲すのみ、盛唐決して此等の詩なし、思渺然の字の如き、趙嘏、只是れ此外に一語を道著すること能はず、若し盛唐の諸公をして代りて此詩を作らしめば、必能く此三字の上になりて、更に一段の工夫を下して、以て一篇絶妙の佳詩を成さん、此れ乃盛唐晚唐の別なり。

絕妙佳詩、此乃盛唐晚唐之別也。

盛唐諸家七絕辭皆渾成、意皆圓足、是以得全體活動、而天機有餘、中唐錢劉七絕稍乏渾成之力、其篇法率皆至中間則略一頓、卻分出以爲結煞、是以其語氣至末則差細、竟與所起語勢難復接應、故一篇已完、尙須著數語以補其意、如劉送裴郎中、送李判官詩及錢歸雁詩皆是也、韋應物皇甫冉輩率亦多用此法、而其稍異者、又乃其起或漫然布景、至結語急生意思、韓翃是也、其他如張繼楓橋夜泊詩、言姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲、此殆非他鄉客裡語、是篇腹已潰裂矣、願況戴叔倫輩、亦總皆同一症候、李益語稍渾成、而情乏含蓄、至如磧裡征人三十萬、是七言

洪園詩話

盛唐の諸家、七絶辭皆渾成、意皆圓足、是を以て全體の活動を得て、天機餘あり、中唐錢劉が七絶、稍渾成の力に乏し、其篇法、率ね皆中間に至りて、則略一頓す、卻て分ち出して以て結煞を爲す、是を以て其語氣末に至りては、則差細に、竟に起す所の語勢と、復接應し難し、故に一篇已に完く、尙須く數語を著けて、以て其意を補ふべし、劉が裴郎中を送り、李判官を送る詩、及錢が歸雁の詩の如き、皆是なり、韋應物、皇甫冉が輩、率ね亦多く此法を用ふ、而して其稍異なる者は、又乃其起或は漫然景を布き、結語に至り急に意思を生ず、韓翃是なり、其他張繼が楓橋夜泊の詩の如き、姑蘇城外寒山寺、夜半の鐘聲と言ふ、此殆他郷客裡の語に非ず、是篇腹已に潰裂す、願況戴叔倫か輩、亦總て皆同一症候、李益、語稍渾成にして、而して情含蓄に乏し、磧裡征人三十萬の如き、是七言歌行の語氣、劉禹錫、亦歌行の語を以て絶句を作る、結に至りて往々收束し難し、其他の諸人、率ね亦皆此類なり。

歌行語氣劉禹錫亦以歌行語作絕句至結
往往難收東其他諸人率亦皆此類也。

張仲素漢苑行回雁高飛太液池新花低發
上林枝年光到處皆堪賞春色人間總未知
是太液上林乃以第三句中到處二字小東
回雁高飛新花低發乃以第三年光二字小
東而皆堪賞三字乃併二小東而又大繳結
之者也盛唐無此法其似結束者亦唯是照
前一提者譬如賈至送李侍御詩雪晴雲散
北風寒楚水吳山道路難今日送君須盡醉
明朝相憶路漫漫此今日字非結束乃一提
雪晴雲散之句者也明朝字亦非結束乃一
提楚水吳山者也如李白此夜曲中聞折柳
何人不起故園情及此行不爲鱸魚膾自愛

張仲素漢苑行回雁高飛太液池新花低發發上林
の枝年光到處皆堪賞するに堪へたり春色人間總て未
だ知らず是太液上林乃第三句中到處の二字を以て
小東す回雁高く飛び新花低く發く乃第三の年光の二
字を以て小東す而して皆賞するに堪へたりの三字乃
二小東を併せて又大に之れを繳結する者なり盛唐此の
法無し其結束に似たる者も亦唯是前を照して一提する
者譬へば賈至が李侍御を送る詩の如き雪晴れ雲散じ
て北風寒し楚水吳山道路難し今日君を送る須く醉を
盡くすべし明朝相憶は路漫漫此今日の字結束に非
ず乃雪晴れ雲散する句を一提する者なり明朝の字亦
結束に非ず乃楚水吳山を一提する者なり李白が此夜
曲中折柳を聞く何人か故園の情を起さざらん及此行
鱸魚の膾の爲ならず自ら名山を愛して郷中に入るの
類の如き亦皆是此法蓋繳結すれば則前言皆死す只提
破すれば則前言猶活く七言絶句體に是四句盛唐の人
句毎に之を存す以て反應回映の地を爲す中唐の人句

名山入鄴中之類、亦皆是此法、蓋繳結、則前言皆死、只提破、則前言猶活、七言絕句、纔是四句、盛唐人、每句存之、以爲反應、回映之地、中唐人、每句繳之、欲以便後之收煞、此亦盛中作法、所以相異之一端。

盛唐人、作絕句、每其首、所命意、往往堪取、以爲一箇絕妙佳題、譬如王昌齡春宮曲、所命意、乃是隔簾望月色、如王維崔處士林亭、乃是萬綠中間一雙白、如李白秋下荆門詩、乃是溪口樹空望剡中、如蛾眉山月歌、乃是身在三峽舟、思懸平羌月、如王昌齡送別魏三、乃是雨航坐想遙天月、此類甚多。

王昌齡集中、長信秋詞五首、第五首、乃合前四首之意、以爲一首者、蓋其第一首、金井梧

毎に之れを繳す、以て後の收煞に便にせんと欲す、此亦盛中の作法、相異る所以の一端なり。

盛唐人の絶句を作る、其首毎に、意を命ずる所往々取りて以て一箇の絶妙佳題と爲すに堪へたり、譬へば王昌齡が春宮の曲の如き、意を命ずる所、乃是れ簾を隔て、月色を望む、王維が崔處士が林亭の如き、乃是れ溪口樹空ふし、李白が秋、荆門を下る詩の如き、乃是れ溪口樹空ふして剡中を望む、蛾眉山月の歌の如き、乃是れ身は三峽の舟に在り、思は平羌の月に懸く、王昌齡が魏三を送別するが如き、乃是れ雨航に坐して遙天の月を想ふ、此類甚多し。

王昌齡が集中、長信の秋詞五首、第五首、乃前の四首の意を合して、以て一首と爲す者なり、蓋其第一首、金井梧桐は、乃其第五首の起句、長信宮中秋月明を咏するの詩な

桐乃咏其第五首起句長信宮中秋月明之詩也其第二首高殿秋砧乃咏其第五首承句昭陽殿下擣衣聲之詩也第三首奉帚平明乃咏其轉句白露堂中細艸色之詩也第四首真成薄命乃咏其合句紅羅帳裡不勝情之詩也探蓮曲二首荷葉羅裙乃咏其第一首第三句來時浦口花迎入之詩也意此外向當有咏其第二四句之詩蓋逸之也。

本邦釋空海所著文鏡秘府論所引昌齡句率多今集中所無寄驩洲詩與君遠相知不道雲海深又見譴至伊水詩得罪由己招本性易然諾又題上人房詩通經彼上人無迹任勤苦又送別諸詩云春江愁送客蕙草生氣氤又云河口餞南客進帆清江水此外尙

り其第二首高殿の秋砧は乃其第五首の承句昭陽殿下擣衣の聲を咏するの詩なり第三首帚を奉す平明は乃其轉句白露堂中細草色を咏するの詩なり第四首真に薄命を成すは乃其合句紅羅帳裡情に勝へざるを咏するの詩なり探蓮曲の二首荷葉羅裙は乃其第一首第三句來る時浦口花迎へ入るを咏するの詩なり意ふに此外尙當に其第二の四句を咏するの詩あるべし蓋之れを逸するなり。

本邦釋空海著す所の文鏡秘府論に引く所昌齡が句率ね今の集中無き所多し驩洲に寄する詩君と遠く相知る雲海の深きを道はず又譴せられて伊水に至るの詩罪を得るは己より招く本と性然諾し易し又上人の房に題する詩經に通する彼の上人迹なく勤苦に任す又送別の諸詩に云ふ春江愁ひて客を送る蕙草氣氤を生ず又云ふ河口南客を餞す帆を進む清江の水此外尙甚多し而して皆今の集の有らざる所乃知る今傳ふる

甚多、而皆今集所不有、乃知今所傳諸家集、
闕脫亡逸者固多矣。

昌齡集中、殿前曲二首、殊淺淺恐、非龍標所作也、以春宮曲唐人絕句中題作殿前曲、思之、蓋此二首、本作於他人之手、而與昨夜風開詩、當時樂府採而合之、以殿前曲命其名者、而後人不知、第見其中有昌齡之詩、因併其二詩、亦編入於集中者也、其如駕出長安五律、本是宋之間詩、亦誤竄入者也。

少陵七言律、解者往往未能到作者之意、如曲江對酒詩三四、林花著雨、臙脂濕、水荇牽風、翠帶長、臙脂翠帶二語、竝皆爲結言、暫醉佳人錦瑟、傍作引者、如江亭晚色、靜年芳句、蓋言曲江晚春、是爲一年芳菲最盛之會、而

所諸家集闕脫亡逸する者固より多きを。

昌齡が集中、殿前の曲二首、殊に淺々、恐くは龍標が作る所に非ず、春宮の曲、唐人絶句中に題して殿前の曲と作すを以て之を思ふに、蓋此二首、本と他人の手に作らる、而して昨夜風開くの詩と、當時、樂府採りて之れを合し、殿前の曲を以て其名を命する者ならん、而して後人知らずして、第其中昌齡の詩あるを見て、因て其二詩を併せ、亦集中に編入する者なり、其駕して長安を出づの五律の如き、本是れ宋之間の詩、亦誤りて竄入する者なり。

少陵が七言律、解する者往々未だ作者の意に到ると能はず、曲江酒に對する詩の如き、三四、林花雨を著けて臙脂濕ひ、水荇風を牽て翠帶長し、臙脂翠帶の二語、竝に皆結に暫く醉ふ佳人錦瑟傍と言ふが爲に引を爲す者なり、江亭の晚色、年芳靜なり、の句の如き、蓋言曲江の晚春、是一年の芳菲最盛んなるの會と爲す、而して此日滿苑の

此日滿苑細雨遊玩者無一人至也、如卽事詩、暮春三月巫峽長、晶晶行雲浮日光、雷聲忽送千峰雨、花氣渾如百和香、巫峽長、乃爲第三句千峰字作伏也、晶晶行雲浮日光、乃爲第三句忽字作反襯者也、而解者不知矣、如題張氏隱居詩、乘興杳然迷出處、出處二字乃本易君子之道或出或處、蓋謂仕與隱者、而解者以爲出路、而不知如此解則殆不成語也、如城西陂泛舟詩、青娥皓齒在樓船、橫笛短簫悲遠天、解者以爲悲遠天、哀吟於空澗之地也、不知其言橫笛短簫悲嘹響、響而自遠聞其聲、卻若在雲霄之表也、如贈獻納起居田舍人詩、獻納司存雨露邊、地分清切任才賢、分字本分際之義、蓋亦三聲通轉

細雨遊玩する者一人も至るとなきとを、卽事の詩の如き、暮春三月巫峽長し、晶々たる行雲日光浮ぶ、雷聲忽送る千峰の雨、花氣渾て百和香の如し、巫峽長は、乃第三句千峰の字の爲に伏を作すなり、晶々たる行雲日光浮ぶは、乃第三句、忽の字の爲に、反襯を作す者なり、而して解する者知らず、張氏が隱居に題する詩の如き、興に乗じて杳然として出處に迷ふ、出處の二字、乃易の君子の道或は出或は處るに本づく、蓋仕ると隱るゝとを謂ふ者にして、而して解者以て出路と爲す、而して此の如く解するときは則殆ど語を成さざるを知らず、城西陂に舟を泛ぶの詩の如き、青娥皓齒樓船に在り、橫笛短簫遠天に悲しむ、解者以爲ふ、遠天に悲しむは空澗の地に哀吟するなりと、知らず其言ふは橫笛短簫、悲嘹響を飛ばして、而して自ら遠く其聲を聞くに、卻て雲霄の表に在るが若くなるを、獻納起居田舍人に贈る詩の如き、獻納司存雨露の邊、地分清切にして才賢に任す、分字、分際の義に本づく、蓋亦三聲通轉なり、田九判官に贈る詩の如き、宛馬

也、如贈田九判官詩、宛馬總肥春苜蓿、春古本作、秦、蓋字誤、而解者不知、此類不違枚舉矣。

明譚宗公近體秋陽論詩疵病、而切中肯綮、曰、詩有篇病、有聯病、有句病、有字病、亡情強作、見韻率爾爲之、奮興而躡末、無比興之趣、前後不相屬、輒相矛盾、無層折、無次第、先構中聯、而以首尾襯帖成之、此篇病也、兩聯對法略同、讀之取厭、如李羣玉灘惡黃牛吼、城孤白帝秋、水寒巴字急、歌迴竹枝愁、四句一法、又上聯以甲乙分對、而下聯單承甲、或單承乙、偏發其一、以虛對實、以客對主、千必偶萬、似必匹、如、如羅隱時、天地雖同力、運去英雄不、由、時來運去、駭俗到不了、此聯病

淇園詩話

總て肥春苜蓿、春、古本秦に作る、蓋、字の誤なり、而るに解者知らず、此の類枚舉するに違あらず。

明の譚宗公、近體秋陽に、詩の疵病を論して、切に肯綮に中る、曰、詩に篇の病あり、聯の病あり、句の病あり、字の病あり、情亡くして強いて作り、韻を見て率爾之れを作り、奮興して而して末に躡き、比興の趣なく、前後相屬せず、輒相矛盾して層折なく、次第なく、先づ中聯を構して、而して首尾を以て襯帖して之れを成すは、此れ篇の病なり、兩聯對法、略同じきは、之れを讀んで厭を取る、李群玉が灘惡くして黃牛吼き、城は孤なり、白帝の秋、水寒よし、て巴字急に、歌迴りて竹枝愁よの如き、四句一法、又上聯、甲乙を以て分對し、而して下聯單に甲を承け、或は單に乙を承け、偏に、其一を發し、虛を以て實に對し、客を以て主に對し、千は必、萬に偶し、似は必、如に匹す、羅隱が、時來りて天地力を同うすと雖、運去りて英雄自由ならずの如き、時來、運去、駭俗到りて了ならず、此れ聯の病なり、

也。語拙意庸俗、結撰平直、本無意思、而邂逅成言、過取切近、使風情墮隕、用古而爲古所拘牽、不能化裁、幹運此句病也。雙字單用、如燥燥逢逢、罪罪萋萋等字、不可折取之類、白居易鸚爲能言、常剪翅、李嘉祐登鱸一望倍含悽、折用鸚鵡舳艫字、大爲疾病、單句犯曲韻、如盧綸玉壺傾菊酒、一顧一淹留、彩筆徵枚叟、花筵舞莫愁之類、本非連用成語字、而句尾兩字同韻、如韓翃人家舊在白鷗洲之類、若香山共除黃叟酒、同上莫愁樓、則二病齊犯之矣。五言、七言、二五字同韻、如高適諸生曰萬盈、杜甫風稜瘦骨成之類、卽七言五七字同韻、亦不好讀、又一字之筋力、恆生一句之色、凡煉句皆然、此法少陵最工、卽此一

語拙く意庸俗、結撰平直、本と意思なく、而して邂逅に言を成し、過ちて切近を取り、風情をして墮隕せしむ、古を用ひて而して古に拘牽せらる、化裁幹運すること能はず、此れ句の病なり。雙字單用す、燥々、萋々、罪々、萋々等の字の如き折取すべからざるの類、白居易、鸚鵡は能く言ふが爲に常に翅を剪らる、李嘉祐、登鱸一望倍、含悽、鸚鵡舳艫の字を折用す、大に疾病たり、單句、曲韻を犯す、盧綸「玉壺、菊酒を傾く、一顧一たひ淹留す、彩筆枚叟を徵し、花筵莫愁を舞はず」の類の如き、本、成語の字を連用するに非ず、而して句尾兩字韻を同しくす、韓翃が、人家舊と在り白鷗洲の類の如き、香山が共に除る、黃叟が酒、同じく上る莫愁か樓の若き、則二病齊しく之れを犯す、五言七言、二五の字、同韻、高適が「諸生に萬盈と曰ふ、杜甫が「風稜瘦骨成る」の類の如き、卽七言に五七の字同韻、亦讀むを好まず、又一字の筋力、恆に一句の色を生ず、凡煉句皆然り、此法少陵最工なり、卽此一字佳ならざれば、一句索然たり、此れ字の病なり、詩を學ぶ者、尤此等の四病を

字不佳、一句索然矣、此字病也、學詩者、尤不可不知、此等四病也。

王績野望詩、句句字字、皆傷時將亂之語、孟浩然臨洞庭詩、句句字字、皆傷權臣蔽君之語、唐詩固多、此比喻借言以述己意之作、而近時解詩者、務其說平易、乃不敢言及此、亦一概之見、非公論也。

高適詩、東路雲山合、南天瘴癘和、和字前人解皆爲融和之義、誤矣、當爲和兼之義、蓋言南方風土多瘴氣、兼有瘴風也、思深常帶別、常字是當字誤、思深二字、本於延陵季子聽樂之語者、山空木葉乾、山空者、謂搖落候早林已空虛、而委地隕籜、又皆成稿乾也、杜甫詩、范蠡舟偏小、王喬鶴不羣、言其所攜資裝

知らずんばあるべからず。

王績野望の詩、句々字々、皆時の將に亂れんとするを傷むの語、孟浩然洞庭に臨む詩、句々字々、皆權臣を蔽ふことを傷むの語、唐詩固より此比喻借言以て己れが意を述ぶるの作多し、而して近時詩を解する者、其說の平易ならんことを務めて、乃敢て言ふて此に及ばず、亦一概の見、公論に非ざるなり。

高適が詩、東路雲山合し、南天瘴癘和す、和の字、前人の解皆融和の義と爲すは誤れり、當に和兼の義と爲すべし、蓋南方の風土瘴氣多く、兼ねて瘴風あるを言ふなり、「思深は常に別を帶ぶ、常の字は是れ當の字の誤り、思深の二字、延陵季子、樂を聽くの語に本づく者、山空ふして木葉乾く、山空とは搖落の候、早林已に空虚にして、地に委する隕籜、又皆稿乾を成すを謂ふ、杜甫か詩、范蠡舟偏に小、王喬鶴群せず、其攜ふる所の資裝、必しも多きを求めず、故に他舟に比するに更に偏に小なるを言ふ、鶴群せず、亦群類と相依るを事とせざるを謂ふなり。

不必求多、故比他舟更偏小也、鶴不羣、亦謂不事與群類相依也。

岑參送張子尉南海、海暗三山雨、花明五嶺春、此鄉多寶玉、慎莫厭清貧、暗明二字、自然與結語戒勿行暗汚濫之事之意相映、李白送友人入蜀、芳樹籠秦棧、春流遶蜀城、升沈應已定、不必問君平、芳樹句與升字映、春流句與沈字映、碁母潛送章彝下第、黃鸞啼就馬、白日暗歸林、三十名未立、君還惜寸陰、日暗寸陰相映、盛唐詩多用此映接法者。

黃鶴樓詩、全篇主意、言昔人已去不復返、則此地黃鶴樓、不知餘此古蹟者、竟成何用乎、徒令吾輩羈旅之人、登臨以望故鄉、卻增客愁耳、鳳皇臺詩全篇、立意頗冗雜、不如崔直

岑參、張子が南海に尉たるを送る、海は暗し三山の雨、花は明なり五嶺の春、此郷寶玉多し、慎んで清貧を厭ふこと莫れ、暗明の二字、自然に結語の暗汚濫の事を行ふこと勿れと戒むるの意と相映す、李白が友人の蜀に入るを送る、芳樹秦棧を籠め、春流蜀城を遶る、升沈應に已に定れるべし、必しも君平に問はず、芳樹の句、升字と映す、春流の句、沈の字と映す、碁母潛、章彝が下第を送る、黄鸞啼いて馬に就き、白日暗くして林に歸る、三十名未だ立たず、君還りて寸陰を惜しめ、日暗寸陰相映す、盛唐の詩は此映接の法を用ふる者多し。

黃鶴樓の詩、全篇の主意、言ふ昔人已に去りて復返らず、則此地の黃鶴樓、知らず此古蹟を餘す者、竟に何の用を成すや、徒に吾輩羈旅の人をして登臨して以て故郷を望み、卻て客愁を増さしむるのみと、鳳皇臺の詩全篇、意を立つる頗冗雜、崔が直截痛快なるに如かず、宜なり其嘗

截痛快、宜矣其嘗欲槌碎之也。

岑參秦女峰頭雪未盡、胡公陂上日初低、愁
窺白髮羞微祿、悔別青山憶舊溪、白髮與峰
頭雪、亦是映接法。

排律本不得強作、唯視其所賦之事當必用
大篇雄辭繁言縟稱、然後始得盡其物狀情
態者、而後用此體賦之、其起語不宏壯、則其
氣不足以貫穿其中間數聯、以成一篇、結語
亦然。

排律篇長句多、而其開闔變化之法、雖亦難
以一律定、而要之祇亦律絕同法、而不過其
重疊之間、手法有小異耳。

兩漢天質自然、魏稍加筆贍、而渾樸尙完、馬
晉已下文益勝質、而漸流綺靡、昔賢言古詩、

淇園詩話

て之れを槌碎せんと欲することや。

岑參秦女峰頭雪未だ盡きず、胡公陂上日初めて低る、愁
へて白髮を窺ふて微祿を羞ぢ、青山に別れしを悔いて舊
溪を憶ふ、白髮と峰頭の雪と、亦是れ映接の法なり。

排律、本強て作ることを得ず、唯其賦する所の事、當に必
大篇雄辭繁言縟稱を用ひて、然して後に始めて其物狀情
態を盡くすことを得べき者を視て、而して後に此體を用
ひて之れを賦す、其起語、宏壯ならざれば、則其氣以て其
中間數聯を貫穿して以て一篇を成すに足らず、結語も亦
然り。

排律篇長く句多し、而して其開闔變化の法、亦一律を以
て定め難しと雖、而して之れを要するに、祇亦律絶同法
にして、而て其重疊の間、手法、小異あるに過ぎざるのみ。

兩漢は天質自然、魏は稍筆贍を加ふ、而して渾樸尙完し、
馬晉已下文益質に勝ちて、漸く綺靡に流る、昔賢、古詩を

三三

必推漢魏者、論固不可易已、雖然李唐以後詩體既已一變、人無不習律絕、而所以吟性咏情之道、辭已不便於法、彼而文亦固宜於守此、則當今之世、欲爲漢魏之古詩者、乃亦不達之尤者也、少陵一生不作擬古樂府、豈亦有見乎此者與、明李攀龍云、唐無五言古詩、而其在古詩、陳子昂以其古詩爲古詩、不取也、乃其集中自漢魏歌、已下無所不擬、而送別、贈酬、率做漢魏、於是當時詩人、慕尙成風、朱鷺上之回、必列於集中、送別贈酬、必裝漢體、唯論巧拙於詭遇、而不知馳驅無範之可恥、古云、文章關時運、則當時士風之輕佻、斯亦可以觀焉矣、

李白擬古樂府題、雖因古、而機軸由己、是以

言ふ、必漢魏を推す者は、論固より易ふべからざるのみ、然りと雖、李唐以後、詩體既已に一變す、人、律絶を習はざるはなし、而して其性を吟じ情を咏する所以の道、辭已に彼れに法とるに便ならず、而して文も亦固より此れを守るに宜し、則今の世に當りて、漢魏の古詩を爲らんと欲するは、乃亦達せざるの尤なる者なり、少陵、一生擬古樂府を作らず、豈たゞ亦此に見ることある者か、明の李攀龍云ふ、唐に五言古詩なし、而して其古詩ある、陳子昂其古詩を以て古詩と爲す、取らざるなりと、乃其集中漢魏歌より、已下擬せざる所なし、而して送別、贈酬、率ね漢魏に倣ふ、是に於て當時の詩人、慕尙して風を成し、朱鷺上之回、必、集中に列す、送別、贈酬、必、漢體を裝す、唯巧拙を詭遇に論じて、而して馳驅、範するなきの恥づべきを知らず、古に云ふ、文章、時運に關すと、則當時士風の輕佻、斯れ亦以て觀る可し、

李白擬古樂府の題、古に因ると雖、而して機軸は己に由

如烏夜啼烏棲曲諸作、辭思超拔、賀盛欽、其天才、其人平生數稱謝朓、不賞、而其詩句法、與謝相類者、間亦多見、意其欽慕之至、諷習之久、不自期而致此邪、非摸擬而然者也、至於子美前後出塞、無家別、新婚別等作、辭不離唐、而神氣骨格、殆與漢魏抗衡者、乃又學古之尤善者矣。

詩之有排律也、猶文之有賦也、有古詩也、猶文之有記序也、故古詩之作、亦不以記事、則以叙事、是故古詩長篇、必專用起伏頓挫抑揚開闔、然後成篇、排律成篇、亦雖有用此數法、然對偶排聯、其體所尙、是以言物貴有、有域成章、貴有界段、如軍伍部署已定、不容復踰列而立、而古詩乃專以反覆照應成篇、此

る、是を以て烏夜啼、烏棲曲の諸作の如き、辭思超拔なり、賀盛、其天才を欽す、其人平生數、謝朓を稱して置かず、而して其詩句の法、謝と相類する者、間亦多く見る、意ふに其欽慕の至り、諷習の久しき、自ら期せずして此れを致すか、摸擬して然る者に非ず、子美が前後出塞、無家別、新婚別等の作に至りては、辭唐を離れず、而して神氣骨格、殆漢魏と抗衡する者は、乃又古を學ぶの尤善き者なり。

詩の排律あるや、猶文の賦あるがごとし、古詩あるや、猶文の記序あるがごとし、故に古詩の作、亦以て事を記せざれば、則以て事を叙す、是故に古詩の長篇、必専ら起伏頓挫抑揚開闔を用ひて、然して後に篇を成す、排律の篇を成す、亦此數法を用ふることにありと雖、然も對偶排聯、其體の尙ぶ所、是を以て物を言ふに分域あるを貴ぶ、章を成すに界段あるを貴ぶ、軍伍の部署已に定まりて、復列を踰えて而して立つべからざるが如し、而して古詩は乃専ら反覆照應を以て篇を成す、此れ排律古詩體裁の異なるなり。

俳律古詩體裁之異也。

孟浩然集、今本誤字甚多、今摘其一、二、宿桐柏觀詩、鶴唳清露垂、今本唳作淚、鶯濤空浩、今本作露濤、過吳張二子檀溪別業詩、停杯問山簡、何似習池邊、今本似作以、峴澤作美人騎、金錯、今本騎作聘、登總持浮屠詩、四門開帝宅、阡陌俯人家、今本俯作附、宿武陽川詩、就枕明滅燭、扣船聞夜漁、明字疑吹字、誤、永嘉浦逢張子容詩、蟹宇鄰、鮫室、今本蟹作解、同儲十八洛陽道中、中字誤衍者也、此類甚多。

岑參燉煌太守後庭歌、美人紅粧色正鮮、倒垂高髻插金鈿、醉坐藏鉤紅燭前、不知鉤在若箇邊、爲君手把珊瑚鞭、射得半段黃金錢、

孟浩然が集、今本誤字甚多し、今其一二を摘せん、桐柏觀に宿する詩、鶴唳^{たつ}清露垂る、今本唳、淚に作る、鶯濤空しく浩々、今本露濤に作る、吳張二子が檀溪の別業に過る詩に、杯を停めて山簡を問ふ、習池の邊に何似んと、今本似、以に作る、峴澤の作に、美人金錯を騎す、今本騎、聘に作る、總持の浮屠に登る詩、四門帝宅を開き、阡陌人家に俯す、今本俯、附に作る、武陽川に宿する詩、枕に就て明燭を滅し、船を扣て夜漁を聞く、明の字疑くは吹字の誤、永嘉浦にして張子容に逢ふ詩、蟹宇、鮫室に鄰る、今本蟹、解に作る、儲十八の洛陽の道中に同す、中の字誤りて衍する者なり、此類甚多し。

岑參が燉煌の太守の後庭の歌に、美人紅粧色正に鮮なり、倒に垂る高髻金鈿を挿む、醉坐鉤を藏す紅燭の前、知らず鉤は若箇の邊にあるを、君か爲に手づから珊瑚の鞭を把り、射得す半段の黃金錢、此の中樂事亦已に備し、

此中樂事亦已偏、半段黃金錢、言初所賭金錢堆垛作積、今美人手把珊瑚鞭、射以中之、竟贏得其半段也、段蓋分割截斷之義、岑參集、送李卿賦、後孤島石詩、綠窠攢剝蘇、尖頂坐鷓鴣、今本頂作頌。

岑參集中、句多雷同者、夫人堂上泣羅裙、句再見、一與獨孤漸道別七言古詩、一送李明府七言絕句、暮雨濕行裝、送懷州吳別駕詩、而細雨濕行裝、見送天平何丞入京詩、其前句云、回風醒別酒、而送薛播詩、雨氣醒別酒、送劉郎將、河東山雨醒別酒、崔駙馬山池重送宇文明府詩、池涼醒別酒、饒州西亭陪宴詩、紅亭出鳥外、早秋與諸子登饒州西亭觀眺詩、亭高出鳥外、登嘉州凌雲寺作、寺出飛

と、半段の黃金錢は、初め賭する所の金錢堆垛して積を作す、今美人手づから珊瑚の鞭を把り、射て以て之れに中で、竟に其半段を贏ち得たる言ふなり、段は蓋、分割截斷の義、岑參か集、李卿を送り、孤島石を賦し得たりの詩、「綠窠、剝蘇を攢め、尖頂鷓鴣を坐せしむ、今本頂頌に作る。

岑參集中、句、雷同なる者多し、夫人堂上羅裙に泣く、の句再び見ゆ、一は獨孤漸と別を道ふ七言古詩、一は李明府を送る七言絕句、暮雨行裝を濕す、懷州の吳別駕を送る詩、而して、細雨行裝を濕す、は、天平何丞が京に入るを送るの詩に見ゆ、其前句に云ふ、回風別酒を醒すと、而して薛播を送る詩に、雨氣別酒を醒す、劉郎將を送る、河東の山雨別酒を醒す、崔駙馬山池にして重ねて宇文明府を送る詩、池涼にして、別酒醒む、饒州の西亭に宴に陪する詩、紅亭鳥外に出づ、早秋諸子と饒州の西亭に登り觀眺する詩、亭高く鳥外に出づ、嘉州凌雲寺に登るの作、寺は出づ飛鳥の外、封大夫に陪して滄海亭に宴する納涼の詩、細管清絲を雜ゆ、嚴河南を送る七言律、嬌歌急管清絲を雜ゆ、此の若きの類一にして足らず、崔全被放を送

鳥外陪封大夫宴瀚海亭納涼詩細管雜清
絲送駿河南七言律嬌歌急管雜青絲若此
類不一而足至如送崔全被放送薛彥偉送
蒲秀才三詩全篇大半雷同因知岑參詩多
不經思而成故也。

杜甫林花著雨臙脂濕今本作落按王彥輔
說云此詩題於院壁濕字爲蝸涎所蝕蘇長
公黃山谷秦少游僧佛印因見缺字各拈
一字補之蘇云潤黃云老秦云嫩佛印云落
覓集驗之乃濕字也見杜詩詳注前輩雖讀
古人詩於其字眼之處輒用心便爾。

杜甫七言古詩往往出奇語以令其格頓高
如偏側行中行路難行澁如棘我貧無乘非
無足姜七少府設膽歌河凍味魚不易得鑿

る薛彥偉を送る蒲秀才を送る三詩の如きに至りては、
全篇大半雷同す、因て知る岑參か詩多く思を經ずして
而して成る故なることを。

杜甫林花雨を著けて臙脂濕ふ、今本落に作る、按するに
王彥輔が説に云ふ、此詩院壁に題す、濕字蝸涎に蝕せら
る、蘇長公黃山谷、秦少游僧佛印と偕に缺字を見るに因
て、各一字を拈して之れを補ふ、蘇は潤と云ふ、黃は老と
云ふ、秦は嫩と云ふ、佛印は落と云ふ、集を寛めて之れを
驗するに乃濕の字なりと、杜詩詳注に見ゆ、前輩古人の
詩を讀むと雖、其字眼の處に於て、輒、心を用ふることに便
ち爾り。

杜甫七言古詩往々奇語を出だす、以て其格をして頓に
高からしむ、偏側行中の如き、行路行き難ふして澁こと
棘の如く、我貧にして乘なくとも足なきに非ず、姜七

氷恐侵河伯宮、趙公大食力歌、憑軒拔鞘天
 爲高、飄風轉、日木怒號、又云、蜀江如線、針如
 水、前苦寒行、楚行夾峽水入懷、又云、凍埋蛟
 龍、南浦縮、晚晴時、赤日照耀從西來、六龍寒
 急光徘徊、惜別行、裁縫雲霧成、御衣、久雨期
 王將軍不至、異獸如飛、星辰落、應弦不礙蒼
 山高、送孔巢父、釣竿欲拂珊瑚樹、又云、蓬萊
 織女回雲車、指點虛無是征路、丹青引、須臾
 九重真龍出、一洗萬古凡馬空、曹將軍畫馬
 圖歌、輕紈細綺相追飛之類、皆是奇語、而子
 美出奇、其意唯在以此約冗語、且使無失其
 神彩、生色、譬猶名畫用筆、大勢大畫、寧失形
 似、無挫氣勢、如白樂天七言歌行、乃是俗畫
 但知摸畫象形而塗抹丹青耳、至如韓退之、

洪圖詩話

少府贈を設くる歌、河凍して味魚得易からず、氷を鑿つ
 て河伯宮を侵さんことを恐る、趙公大食力の歌、軒に憑
 りて鞘を抜けば天爲に高し、風を翻し日を轉して木怒
 號す、又云、蜀江、線の如く針、水の如し、前苦寒行、楚行
 夾峽水懷に入る、又云、凍は蛟龍を埋めて南浦縮す、晚晴
 の詩に、赤日照耀西より來る、六龍寒急光徘徊、惜別行
 「雲霧を裁縫して御衣を成す、久雨、王將軍に期するに、至
 らず、異獸飛ぶが如く星辰落つ、弦に應じて礙へず蒼山
 高し、孔巢父を送る、釣竿、珊瑚樹を拂はんと欲す、又云
 蓬萊織女回雲車、指點す虚無是征路、丹青の引、須臾に
 九重真龍出づ、萬古の凡馬を一洗して空し、曹將軍が畫
 馬の圖歌、輕紈細綺相追ふて飛ぶの類、皆是れ奇語、而し
 て子美が奇を出だす、其意唯此れを以て冗語を約するに
 在り、且其神彩生色を失ふこと無からしむ、譬へば猶名
 畫の筆を用ふるがごとし、大勢大畫、寧ろ形似を失ふと
 も氣勢を挫くこと無かれ、白樂天が七言歌行の如き、乃
 是れ俗畫、但象形を摸畫して丹青を塗抹することを知
 るのみ、韓退之、全が如きに至りては、尙專ら怪奇を尙

三九

盧仝尙專尙怪奇、卻亦是粗畫惡筆、殆所謂里婦而效西施之病顰者矣。

初唐七言古詩辭雖過繁縟、而作者主意率亦皆在、以此寫其神彩生色、盛唐去繁縟尙雅健、而用筆稍兼有流動之態、中唐乃喜事流動、而不知寫神彩生色之爲善、然此其所失、亦在其句句求結束、以便收煞。

太白烏棲曲、乃爲黃雲城中將士、寫其日暮想像秦川家雲裡閨閣之神象者、故繫黃城以其日哺之景、而秦川女其形神意態、卻唯在朦朧彷彿之中、寫隔牖語、乃其寫朦朧者也、停梭悵然、乃其寫彷彿者也。

王維古詩同崔傳答賢弟詩、氣跌宕而語錯落、全篇主意、乃結語所云、遙想風流第一人

○
ぶ卻て亦是れ粗畫惡筆、殆謂ゆる里婦にして西施の病顰に效ふ者なり。

初唐の七言古詩辭繁縟に過ぐと雖、而して作者の主意率ね亦皆在り、此を以て其神彩生色を寫すに、盛唐は繁縟を去りて雅健を尙ぶ、而して筆を用ふる稍流動の態を兼有す、中唐は乃喜んで流動を事とす、而して神彩生色を寫すの善たるを知らず、然して此れ其失する所、亦其何々結束を求め、以て收煞に便するに在り。

太白が烏棲曲、乃黃雲城中の將士の爲に、其日暮、秦川の家に雲裡閨閣を想像するの神象を寫す者なり、故に黃城に繋るに其日哺の景を以てす、而して秦川の女は、其形神意態、却て唯朦朧彷彿の中に在りて寫す、牖を隔て、語るとは、乃其朦朧を寫す者なり、梭を停めて悵然たるは、乃其彷彿を寫す者なり。

王維か古詩、崔傳と同じく賢弟に答ふる詩、氣跌宕として而して語錯落、全篇の主意は、乃結語の云ふ所、遙に想ふ風流第一の人とは、即是れ全篇の主意、其前十五句、並

者、卽是今篇主意、其前十五句、竝是遙想中語、或以景逼之、或以時事逼之、或以他人所品題逼想之、而一一皆莫所不以其風流灑落也、人唯知稱其佳句、夜火人歸、富春郭、秋風鶴唳、石頭城等類、而不知其篇法之妙更倍也。

酬張謔詩、亦寫盡其人物風流、而時復據梧聊隱几、故園高枕度三春、永日垂帷絕四鄰等語、作者意思、唯要將其人平日家居風流逸態寫出來、而李頎高適岑參古詩、率皆如此、中唐人絕無如此意想、賈島五言律、暮過山郵詩、數里聞寒水、山家少四鄰、怪禽啼曠楚、落日恐行人、初月未終夕、邊烽不過秦、蕭條桑柘外、燈火漸相親、此詩備寫山村昏行

に是れ遙想中の語、或は景を以て之れに逼り、或は時事を以て之れに逼り、或は他人の品題する所を以て逼りて之れを想ふ、而して一々皆其風流灑落を以てせざる所なし、人唯其佳句を稱し、夜火人は歸る富春郭、秋風鶴は唳く石頭城等の類を知りて、而して其篇法の妙更に倍するを知らざるなり。

張謔に酬ふ詩、亦其人物風流を寫盡せり、而して、時に復梧に據り、聊、几に隱る、故園枕を高ふして三春を度る、「永日帷を垂れて四鄰を絶す等の語、作者の意思、唯其人平日家居風流逸態を將て、寫し出し來らんことを要す、而して李頎高適岑參が古詩、率皆此の如し、中唐人、絶えて此の如き意想なし、賈島が五言律、暮に山郵を過ぐる詩、數里寒水を聞き、山家四鄰少なり、怪禽曠野に啼き、落日行人恐る、初月未だ夕を終へず、邊烽秦に過らず、蕭條たる桑柘の外、燈火漸く相親しむ、此詩備に山村昏行の景を寫す、況や人家寥落、禽日昏に叫ぶ、新月忽ち没し、邊烽遠く燒く、遠林の燈光を望んで、驚へず、趁逐相

之景況人家寥落、禽叫日昏、新月忽沒、邊烽遠燒、望遠林燈光、不覺趁逐相親、其摸寫非不妙、唯寫景雖逼真、而寫情如影響、不復見其有身分、竟不免類鬼詩也已。

詩寫情須必有體有用、體則未入場前、心本已有著之者是也、用則凡應物而感觸、境而生之屬、皆是也、蓋體爲內、用爲外、如王維不知香積寺、數里入雲峰、不知是體、入是用、然而或因言外、以著其內、或因舉內、以見其外、者皆必不可無此法、而但偏言者、內如夢境、外如幻影、則斷不可爲一語也。

本邦中古、文風太盛、科第銓選、一倣唐制、雖清華樞切、時由詩賦進、於是海內彬彬、賢俊踵興、蓋數百年間、家藏和璧、人握隋珠、殆比

親しむ、其摸寫妙ならざるに非ず、唯景を寫すこと眞に逆ると雖、而して情を寫すこと影響の如く、復其身分あるを見ず、竟に鬼詩に類することを免れざるのみ。

詩の情を寫す、須く必體あり用あるべし、體は則未だ場に入らざる前、心本已に之れを蓄ふることあるが是れなり、用は則凡そ物に應じて感じ、境に觸れて生ずるの屬、皆是なり、蓋體は内たり用は外たり、王維香積寺を知らず、數里雲峰に入るの如き、不知は是れ體、入は是れ用、然して或は言外に因て以て、其内を著はず、或は内を擧ぐるに因て以て、其外を見ず者、皆必此の法無くんばあるべからず、而して但、偏言する者は、内、夢境の如く、外、幻影の如く、則斷えて一語を爲すべからざるなり。

本邦中古、文風太だ盛なり、科第銓選、一に唐制に倣ふ、清華樞切と雖、時に詩賦より進む、是に於て海内彬彬々として、賢俊踵ぎて興る、蓋數百年間、家に和璧を藏し、人隋珠を握る、殆、其隆を開天に比す、其後數次の兵燹、名公の著

其隆於開天矣、其後數次兵燹、名公著作都亡、灰燼、前烈典刑、蕩滅略盡、可惜莫甚焉、蓋其遺篇剩什、間存者、或見焚餘之殘簡、或傳海外之偶錄、率皆莫不以競光於珪璋、爭彩於錦繡矣、如安部仲麻呂、命使本國、五言排律、已膾炙盛唐諸人之口、其詩載於唐詩品彙、但其書名胡衡者、乃朝衡之誤、仲麻呂在唐留學時、玄宗授以祕書監職、因自改其姓名、稱朝衡、朝音近晁、故或又稱晁衡、李白有日本晁卿辭帝都詩、王維有送祕書晁監歸日本詩序、皆乃爲仲麻呂作者也。

三百篇固詩之源也、然孔門之教、以詩爲先者、其意本非尙夫田駿紅女之謠也、詩者蓋聖人採其民所謳歌之辭、因纂緝以次序之、

作都て灰燼に亡ぶ、前烈の典刑、蕩滅して略盡く、惜むへきこと焉これより甚しきはなし、蓋其遺篇剩什、間存する者、或は焚餘の殘簡に見へ、或は海外の偶錄に傳ふ、率ね皆以て光を珪璋に競ひ、彩を錦繡に争はざるはなし、安倍の仲麻呂、命を銜んで本國に使用する、五言排律の如き、已に盛唐諸人の口に膾炙す、其詩、唐詩品彙に載す、但其名を胡衡と書するは、乃朝衡の誤なり、仲麻呂、唐に在りて留學する時、玄宗授くるに祕書監の職を以てす、因て自ら其姓名を改めて朝衡と稱す、朝の音、晁に近し、故に或は又晁衡と稱す、李白、日本の晁卿帝都を辭すの詩あり、王維、祕書晁監が日本に歸るを送る詩序あり、皆乃仲麻呂の爲めに作れる者なり。

三百篇は、固より詩の源なり、然して孔門の教詩を以て先爲す者は、其は意は本、夫の田駿紅女の謠を尙ぶに非ず、詩は蓋、聖人、其民の謳歌する所の辭を採り、因て纂緝し、以て之れを次序し、編列して、以て之れを先後す、而して、

編列以先後之、而於其纂緝編列之間、因以言天下所宜志之志、因以立天下所宜道之道者也、是故所謂溫柔敦厚者、亦唯稱於夫所立之道、與所言之志、而初非稱其辭氣文彩也已、後之論作詩者、昧乎斯義、動輒引禮記、口風雅而不讀、然而彼且連篇累章、月鍛日鍊、曷嘗見有益於其爲人也、於虛誣矣、雖然、吟情咏性、哦風弄月、人所必有之事、而既有辭之、則安得不又文之哉、其既已辭之、則必五言七言、其已文之、則必體裁格調、舍此數者、詩不詩矣、則不足以託情感於吟詠、而寄興趣於百載也、且吉甫不有清風之頌、乎、夫子不有龜山之操乎、蓋有暇而學有感、而作、君子未必譏之、抑又後進小子、速習於

其纂緝編列の間に於て、因て以て天下の宜しく志すべき所の志を言ひ、因て以て天下の宜しく道とすべき所の道を立つる者なり、是故に謂はゆる溫柔敦厚なる者とは、亦唯夫の立つる所の道と、言ふ所の志とを稱す、而して初より其辭氣文彩を稱するに非ざるのみ、後の作詩を論する者、斯義に昧く、動すれば輒、禮記を引き、風雅を口にして置かず、然り而して彼の且篇を連ね、章を累ね、月に鍛ひ日に鍊るとも、曷ぞ嘗て其人と爲るに益あるを見ん於、虚誣ひたり、然りと雖、情を吟じ性を咏じ、風に哦し月を弄す、人の必ず有る所の事、而して其れ既に之れを辭することあらば、則安んぞ又之れを文らざることを得んや、其既に之れを辭にするときは、則五言七言、其れ已に之れを文るときは、則必體裁格調、此數者を舍てば、詩詩ならず、則以て情感を吟詠に託して、而して、興趣を百載に寄するに足らず、且吉甫清風の頌あらざるか、夫子、龜山の操あらざるか、蓋暇ありて而して學び、感ずることありて而して作らば、君子未だ必しも之れを譏ら

文字莫善學作詩蓋數其用文以通其情故也。是故余不敢以今歌詩儕之三百篇者、而以吟情咏性、則又未欲其輒廢之也。

予抑又後進の小子速に文字を習ふは作詩を學ぶより善きはなし、蓋數其文を用ひて以て其情を通くするか故なり、是故に余敢て今の歌詩を以て之れを三百篇なる者に儕べず、而れども以て情を吟じ、性を咏するときは、則又未だ其輒之れを廢することを欲せざるなり。

淇園詩話
終

日本詩話叢書

四六

跋淇園詩話

淇園先生詩話成，命淡園二君及僕按之。今既卒業，以授劊劊。僕嘗聞之於先生，夫詩吟咏性情者爾，然高山仰止，景行行止，學者曷可無所仰行焉？如夫宋主骨力，明主聲調，各偏於一端者也。欲學其文質彬彬者，舍唐奚適？然僕亦竊謂崔氏二童，夙振騷壇之金玉，胡家宿儒，其詩不免酒肆行厨之嘲，則天稟所資，非邪，要亦在不以資廢學，以論縛才也。歟！此書先生特爲後進示義方者也。學者由是思之，則庶幾能寢漸開天佳境云。

明和庚寅春三月

門人 平安 巖垣明謹書